

第24回日米インタープリテーション研修

「山から海までの多様な生態系と人々のインタープリテーション」

オリンピック国立公園、ワシントン州

(2022年9月11日～16日)

■ 1日目：9/11 (日)

[SeaTac / Seattle / Port Angeles]

11:00 シアトル・タコマ国際空港着、全体で集合
オリンピック国立公園へ移動、ホテルチェックイン (ポート・アンジェルス泊)

■ 2日目：9/12 (月)

[Port Angeles]

09:00 オリンピック国立公園の概要オリエンテーション 「Mosaic of diversity」
09:30 ハリケーンリッジ・ビジターセンターへ車で移動
10:00 体験「ハリケーンリッジにおけるIP(教育)プログラム」、ビジターセンター見学など
12:00 昼食 @ビジターセンター
13:00 公園本部へ車で移動
13:30 セッション「アメリカ国立公園のIPの動向とベストプラクティス」
Michael Glore, Interpretive Operations Manager, OLYM
Eliza Goode, Visual Information Specialist, OLYM
14:45 休憩
15:00 ウェルカム Sula Jacobs, Superintendent, OLYM
15:30 セッション「日本の国立公園の動向」
環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室 室長 岡野隆宏さん (Zoom 登壇)
「アメリカ国立公園局の概要」 Rudy D'Alessandro, International Cooperation Specialist,
NPS Office of International Affairs
17:15 終了

■ 3日目：9/13 (火)

[Port Angeles / Forks]

09:00 体験「エルワ川をハイキングしながらダム撤去による自然資源の変化について」
Patrick Crain, Fisheries Biologist, OLYM
Dean Butterworth, Outreach and Education Specialist, OLYM
Kim Sager-Fradkin, Wildlife Program Manager of Lower Elwha Klallam Tribe
Natural Resources
13:00 ピクニックランチ @エルワ川のほとり
車で Lake Crescent の Storm King Ranger Station へ移動
14:30 セッション「困難な課題のある資源に関するインタープリテーション」

プチ体験「クレセント湖周辺のガイド」

- 16:00 フォークスへ移動、ワシントン大学オリムピックナチュラリソースセンター (ONRC)着
- 19:00 Mora のトッドさん宅で夕食 (自炊)

■ 4 日目 : 9/14 (水)

[Forks / Kalaloch/Hoh]

- 08:00 フォークス出発、車で移動して Beach4 の駐車場へ
- 09:00 Beach 4 へハイキング
体験「潮だまりの観察」
セッション「NOAA のインタープリテーション戦略」
Chris Butler-Minor, Community Engagement Specialist, Olympic Coast National Marine Sanctuary, NOAA (海洋大気庁)
ハイキングして駐車場へ
Kalaloch Ranger Station へ移動し、昼食 (ピクニックランチ)
- 11:30 Hoh Rainforest へ車で移動
- 13:30 体験「インタープリテーション/人と野生動物の管理」
Todd Cullings, Hoh Rainforest Interpretive Supervisor, OLYM
- 15:30 ORNC へ移動
- 19:00 Mora のトッドさん宅で夕食 (自炊)

■ 5 日目 : 9/15 (木)

[Forks / Makah / Port Angeles]

- 08:00 車で移動 (90分)
- 10:00 体験「マカ博物館ツアー」
Rebekah Monette, Makah Tribal Historic Preservation Officer (THPO)
Janine Ledford, Executive Director, Makah Cultural & Research Center
- 12:00 昼食 (box lunch)
- 13:00 セッション「Cape Flattery へ、海岸の資源マネジメントに関するディスカッション」
Steven Fradkin, Coastal Ecologist / Limnologist, OLYM
Cape Flattery ハイキング
- 16:00 フォークスへ移動、ONRC 着
- 19:00 Mora のトッドさん宅で夕食 (自炊)

■ 6 日目 : 9/16 (金)

[Forks / Port Angeles]

- 10:00 セッション「研修会での学びのふりかえり (各自の活動にどう活用できるか)」
セッション「保護エリアのマネジメントの展望について (気候変動による影響含め)」
日本人参加者+OLYM スタッフ @Forks の図書館
- 12:00 クロージングセレモニー
昼食、Port Angeles に移動しながら観光
- 19:00 ホテルにチェックイン、夕食@レストラン

【参加者（ニックネームのみ掲載）】

Hata-san

Hitoshi

Michell

Naoko

Yoshi

【通訳・コーディネーター】

増田由香子（山梨県）／Office ハッピートレイル／獨協大学非常勤講師 （Yukako）

【引率】

古瀬浩史（東京都）／帝京科学大学／（一社）日本インタープリテーション協会 （Koji）

【アメリカ側の受け入れスタッフ】

Rudy D'Alessandro さん

International Cooperation Specialist – Asia/Pacific/Arctic/Russia

U.S. National Park Service – Office of International Affairs

Todd Hisaichi さん

Interpretation Ranger, Olympic National Park



各日の研修内容

9月12日

【Hurricane Ridge Visitor Center】

オリンピック国立公園でも標高の高いところにあるビジターセンター。この日は好天に恵まれ、センターからは頂に氷河を抱くオリンピック山脈の山々と雲海が見られた。スタッフから、オリンピック国立公園の大まかな成り立ちやビジターセンターの運営についてお話を伺った。



雲海とオリンピック山脈の山々



ビジターセンター前で説明を聞く

- オリンピック国立公園の山々はアメリカ大陸プレートに太平洋プレートが沈み込む過程で盛り上がってできた。同じワシントン州のカスケード山脈が火山活動でできたのとは成り立ちが違う。山脈が南から北へと移動する雨雲を遮るため、山の南側は多湿（Hoh Rain Forest など）、北側は乾燥している（Port Angeles など）。
- 最後の氷河期ではホアンデフカ海峡と Puget 湾は氷と水だった。
- オリンピック国立公園は、その地理的な成り立ちから固有種が多い。様々な分類群で合計 24 種の固有種がいる。（研修中にも固有種の哺乳類 Olympic Chipmunk が目の前を横切った。）
- ビジターセンターにはインタープリテーション部門、教育部門、視覚的な展示部門の 3 つがある。この日は教育部門のスタッフが学校の対応をしていた。
- オリンピック国立公園の管理には、ネイティブアメリカン（以降 Native Tribe と表記）も参画している。オリンピック国立公園のエリアにはもともと多数の Native Tribe がおり、こうした Native Tribe との関係性については研修中なんどもお話にのぼった。

【Olympic National Park Head Quarter】

オリンピック国立公園のヘッドクォーター。ビジターセンターは比較的小規模な印象だったが、オフィスが別棟になっている。オフィスの研修室でスタッフ、環境省の岡野さん、国立公園局国際部の Rudy さんにお話を伺った。

1) Michael Glore さん(Interpretive Operations Manager または Branch Chief)



HQ の研修室での座学の様子



マイケルとジョンミューアトレイル

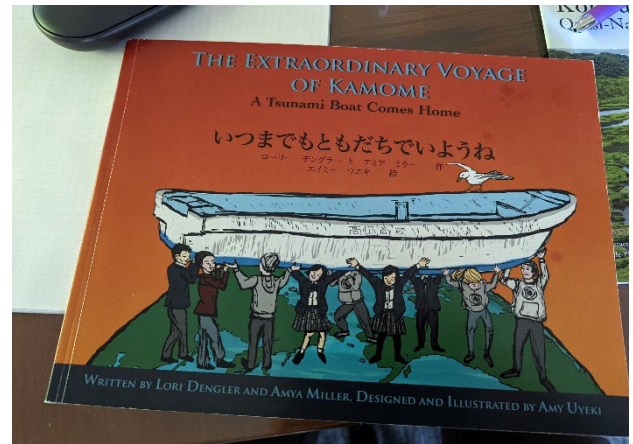
- Michael はビジターセンターのオペレーションや資金管理を担っているマネージャー。オリンピック国立公園にはオペレーション、エデュケーションとアウトリーチ、ボランティア、インフォメーション（ビジュアル）の4つのブランチがあり、この4つをまとめているチーフ。
- Michael は18年国立公園局で働いており、5つの国立公園で働いたことがある。オリンピック国立公園では1年とちょっと。
- この日はMichaelの「Interpretive Journey」と題して、どういった背景で育ち、国立公園で働くことになったのか、また、インタープリテーションについてどのように考えているかを話してくださいました。
- Michael は南カリフォルニアの大きな賑やかな家族で育った。初めて行ったヨセミテで「自分がかここにつながっている（Connectしている）感覚を得、運転免許をとってからは学校をサボってヨセミテに行き、写真を撮ったりしていた。大学に入ってから、ジョンミューアトレイル（250マイル）をひとりでハイキングし、その際に初めて雪に囲まれた恐怖感が強烈な原体験となった。自然の中にこそ自分の居場所がある、という実感を得た。
- ここでMichaelから参加者に向けて「自然の中や歴史的な場所を訪れた際に感じたまたは経験したことを一言で表すならどんな単語になるか？」という問いかけがあり、参加者から「connection」「surprised」「calm」などの単語があがった。
- Michael は小説（映画にもなった）INTO THE WILDにとっても感銘をうけ、死ぬところ抜きでこの青年と同じことをしてみたい、と思うようになった。そんな頃、大学で人類学と考古学を学んだことが新しいJourneyのはじまりになった。
- 大学で考古学の博士号（PhD）を取得し、たくさんの調査などに行ったが何かが足りない。大学の教員になり、次の世代の学生を教える「人を育てる」仕事をしたが、存在意義を失いかけていた。
- そんなときに、「そうだ、自分は国立公園が大好きで、そこで働いている人たちはみんな素敵だった」ということを思い出し、最初の国立公園勤務地となるアラスカのカトマイ国立公園で考古学のバックグラウンドを理由に職を得る。（カトマイには古くから人が住んでいた歴史があるため。）

- インタープリテーションのレンジャーとして就職したが、最初はインタープリテーションが何かも知らなかった。いまも理解したとは思っていない。インタープリテーションにはいくつかの定義があるが、(Knowledge of Resources + Knowledge of Audience) Appropriate Technique = Interpretation Opportunity がとても重要。
- つながり (Connection) が大きな課題だと考えている。火山と世界をつながり、グリズリーに感情的にどのようなつながりを感じるか…まず場所について理解し、その土地へのつながりを作る。こうしたつながりはどうして重要なのか、そして本当にインタープリテーションは必要なのか？ということを考えてほしい。
- 国立公園局のミッションはこの環境を次世代に残し伝えていくこと。このためにも若い世代にインタープリテーションを使って「伝える」ことはとても重要。資源を使い、管理するためにも「つながり」を考えることがとても大切。
- 自分がいまやっていることは、大学というアカデミックな環境で自分が挑戦していたことと通じるものがあると思っている。次の世代を教えて、その世代がさらに次を教えて…というのは大学も国立公園局でも自分にとっては変わらないサイクル。
- 私たちの世界には多くの課題がある。気候変動、社会の不均衡、暴力、コロナ、といった多様な課題に対して、インタープリテーションは何ができるかを考えている。
- ACE (Audience Centered Experience : 参加者中心の体験) のワークショップに参加し、よりよいインタープリテーションができるようになるための講座として感銘を受けた。ACE はこれまでインタープリテーションとは違い、「こういうことを理解して欲しい」というアプローチではなく、参加者から情報を引き出すもの。参加者それぞれの体験や価値観をお互いにシェアすることで、場を充実させ、「つながり」を作っていく。
- 21世紀になって、国立公園は「保全する場所」「ミュージアム」ではなく、人々にとって「安心して意見の表明や挑戦ができる場所」としての役割が重視されるようになった。国立公園は、誰もがお互いの意見を表明して静かにお互いをリスペクトしながら話ができる場所として、そうした「場」を提供できる。国立公園はもはや自然や地質の資源を守るだけではなく、ビジターたちのための場所として保護し育てる場。観客、ビジターも国立公園の資源のひとつになっている。
- 現在ではマネージャーになってしまい、インタープリテーションをする機会は減った。インタープリターのファシリテーターなどのスキルを上げること、多様なバックグラウンドのスタッフを雇用することが自分の今の仕事。多様な体験、多様な旅路をたどってきたたくさんのインタープリターがオリンピック国立公園にはいるので、楽しんでほしい。
- 多様なビジターに対応するためには、インタープリターも多様でないといけない。自然や考古学のバックグラウンドだけではなく、アートやダンスなど、一見して国立公園とは関係のないような分野に造詣が深いスタッフをどんどん雇いたい。



HQ の建物

- 2011年の東日本大震災のあと、2013年に日本の漁船が漂着した。大量に付着した海藻やフジツボを地元の高校生たちが洗い、船名がわかったことで、陸前高田へ船を返却し、交流が生まれた。予想もしない形で2つのコミュニティがつながり、姉妹都市になった。目に見える「漁船」が、目に見えない「友情」「希望」「共感」をつないだ。
- インタープリテーションはプロフェッショナルでもあり、個人的でもあり、旅路でもある。この旅が私たちをどこに運んでいくのかはわからないが、お互いを理解し、内包し、共感することにインタープリテーションが役に立つと信じている。



震災でできた陸前高田との交流の絵本

2) Eliza Goode さん（生態学、ダンス、アートをバックグラウンドに持つスタッフ）

- 両親はグレイシャー国立公園で出会って結婚した。大人になって国立公園でインターンをして、環境教育を学んだ。その後映像の学校に行き、国立公園における映像というテーマで卒論を書いた。（ちょっと上から目線な映像を作った、とは本人の談。）
- 映像は「これを見てこれをしてこういうことを感じなさい」というものが多い。感動しなさい、謙虚になりなさい、小ささを感じなさい…と言わんばかり。ナレーターは五感を妨げる。自分から「たたえたい」と思うことと、映像にそれを強要されることは違う。
- 国立公園大事と思うのは誰にも何も言われずに、感じることに。静かに自然の中で過ごして様々なことを感じるのが自分のやり方。
- これらを踏まえて、新しい国立公園の映像を提案した。ナレーターを入れず、映像を見ている人が直接体験しているような、景色を自分の感じ方で感じてもらえるような映像。ナレーションを入れると、ナレーターの声でジェンダーや年齢を感じてしまい、「自分事」ではなくなってしまうので、多様な人が多様な感じ方をできるようにナレーションを入れなかった。音楽は地元のバンドに依頼し、最初はひとつの楽器とひとつの声から始まって、だんだんと声や楽器が増えていくようにした。
- 言語や障害によらず、意味のある体験は誰にでもできるし、そうでなくてはならない。言葉のない映像はそれを可能にする。
- ソーシャルメディア（SNS）での発信はその時々安全情報などを出しているだけだった。いまではSNSのサービス側がやって欲しいと思っていることを超えた使い方を始めている。SNSは使い方によってはマイナスになることもあるが、オリンピック国立公園ではポジティブに使うようにしている。
- Terminus（終焉）プロジェクト（悲しくも希望があるもの）

<https://storymaps.arcgis.com/stories/6b0840d5d711413d9c02c8bf9de520d9>

- Terminus プロジェクトは毎年のインタープリテーションセクションのリトリートで、レンジャーみんなでアイデアを出すところから出てきたプロジェクト。温暖化の進行でどんどん減少している氷河の「終焉」をテーマに、各氷河をイメージしたアートワークをアーティストに作ってもらっている。アーティストから希望があれば実際に氷河を訪ねてもらう場合もある。
- Eliza が発案。Web サイトギャラリー運営の資金はアーティストを招くアーティスト・イン・レジデンスの費用から出している。アーティストはボランティアで参加。ぜひいろんなところで「消えていくものを残すプロジェクト」を広めて欲しい。ノウハウは教えるのでぜひ連絡して。

3) 岡野隆弘さん（環境省、国立公園利用推進室長）

（千葉大で造園を学び、阿蘇と西表でレンジャーをした経歴がある。残念ながら現地参加がかなわず、この日はリモートでお話をしてくださった。）

- 日本には国立公園全体でのインタープリテーション計画が今のところないが、作成しようとしている動きがある。
- 日本は北から南まで多様で美しい自然が広がり、全国に 34 の国立公園が設定されている。日本の国立公園には人が居住していることが大きな特徴で、人による管理が入る（例えば阿蘇の野焼きなど）ことが重要。
- 2016 年から、日本の観光政策のひとつの大きな柱として「国立公園満喫プロジェクト」が進められている。観光（利用）と保護を両立させることを目指し、「日本の国立公園には物語がある」をブランドメッセージにして海外の観光客にもアピールする政策をとっている。「物語」が日本の国立公園にとっては重要で、そこから得られる学びと感動をしっかり伝えることが大切。
- 「風景をどうやって楽しむか」という利用視点から見える対象場を保護すること。情報（ストーリー、保全の仕組み）を体験、語り、ガイドンス、ビジターセンター等で伝えて感動と学びへと繋げる。こうした情報をどうやって提供するかというのが環境省のインタープリテーション計画。これから骨組みを考えていく。レンジャーにも IP のトレーニングをすることを計画しており、インタープリテーション協会にも協力してもらっている。
- SDGs の時代に世界を変えるためには、人を変える必要があり、そうした変革を生む場所のひとつとして国立公園もあるべきではないかと考えている。

4) Rudy D'Alessandro さん（アメリカ国立公園局本部国際部のスタッフ、労働組合長）

（日米研修に長く携わってくださっている。奥さまが日本の方で、この日は日本語のスライドを用意してくださった。）

- 「国立公園」の理念は、アメリカ最高のアイデアと言われており、映像や書籍化されている。最初に発想したのは 1950～60 年代の作家。最初の国立公園がイエローストーンなのか、ヨセミテなのか、ホットスプリングなのかは議論があるところだが、160 年ほど前に誕生したのは確か。
- 国立公園は国立公園局の管理下にあるが、森林局が管理するエリアや野生生物管理局が管理するエリアなどに囲まれている。森林局が管理するエリアは伐採することができるため、国立公園とは景観が大きく異なり、境界線がはっきりとわかる。所属するスタッフの自然への感覚もやや異なる。

- 国立公園局には現在 423 のユニットがある。全てのユニットが国立公園というわけではない（文化遺産等もあるため）が、管理としては同じだと思って運営をしている。中には国立公園局と地方自治体が協働でプロモーションをしている Cane River のような新しいカテゴリーの場所もある。テネシー州のように、南北戦争の遺跡が集中しているために州全体が遺産になっているところもある。
- 国立公園局の常勤職員は 1 万 4000 人。（日本は 300 人。）しかし予算と財政は決して豊かではなく、これだけのスタッフがいても足りていないのが現状。（※実際、後日訪ねた Hoh Rain Forest のビジターセンターでスタッフ不足の深刻さを目の当たりにし、Rudy さんはさっそくオリンピック国立公園長に連絡していた。）
- 国立公園局の業務は多岐にわたる。
 - ・ 自然資源管理（例：エルクの違法ハンティングの形跡調査）
 - ・ 文化資源管理（デンバーに本部）
 - ・ 文化遺産管理（ヨセミテやイエローストーンのような自然遺産よりは文化遺産の方が数は多い）
 - ・ 歴史的建造物保全のリーダーシップ（自由の女神は国立公園局が管理しており日本で言えば文化庁的なところと環境省が合体している）
 - ・ 解説と教育（トランクキットなどを使ってインタープリテーションをする）
 - ・ 公園計画
 - ・ 環境収容力に関する業務（どれだけ国立公園が人を受け入れられるか、例えばグランドキャニオンの展望台ではどこまでのビジターを入れるのが安全かを調べたり、大学の社会学者と協働でビジターの国立公園内での行動を調査したりする。400 以上の大学の科学者のネットワーク Cooperative Ecosystem Studies Network に資金提供し、調査をしてもらっている。）
- コンセッション方式（営業権所有者との請負契約）による管理を行っている。（※コンセッションとアソシエーションはアメリカ国立公園の管理の手法。コンセッションは民間事業者と 1 年程度の短期契約を結び、ホテルやレストラン等の運営を任せるもの。アソシエーションはより長期にわたる関係、すなわちパートナーシップを NGO などと築き、ミュージアムグッズの選定やミュージアムショップ等の運営を任せるもの。）国立公園は大きな経済効果がある。民間事業者と契約を結び、国立公園局のルールに従ってホテル等の民間施設を運用してもらっている。全ての国立公園でおよそ 500 のコンセッションがあるが、それによって 2 万人の雇用がうまれている。
- アメリカの国立公園は経済効果が高く、国立公園を訪れる人の食事や宿泊はアメリカの観光分野では大きな割合を占めている。にもかかわらず国立公園局の職員は増えていない。いい循環を生み出すためには、例えば国定公園も地元の業者と提携してサービスを生むことが大切。場所を保全しつつ経済効果を創出することが重要。
- ボランティアの役割も重要。2021 年、アメリカの国立公園では 22 万人のボランティアが作業を提供した。多いときは 40 万人のボランティアがおり、労働力の提供だけではなく、ボランティアを通じて国立公園への理解を深めてもらっている。
- パートナー（※前述のアソシエーション）：グランドキャニオンのグランドキャニオンアソシエーション（NGO）のようなパートナー団体が各国立公園にある。ショップの運営、教育プログラムの

提供、調査などを担ってもらっている。（グレートスモーキーマウンテンとのオンラインセミナーでもパートナーシップの話が出ていた。）

- 保護と観光のバランスを保つことが重要。イエローストーンではスノーモービルの数の制限などを行っている。人に楽しんでもらうこともミッションのひとつだが、保全とのバランスをとるのが大切。
- 中でも車は大きな問題になっている。駐車場の不足、事故の発生、CO2 発生など、シャトルバスに切り替えるなどの取組が始まっている。駐車場に車を停めるのに予約が必要なケースもある。（※後日訪ねた Hoh Rain Forest ビジターセンターでも、駐車場管理に少ないスタッフが割かれることが大きな課題になっていた。）
- ビジターの安全確保も重要。以下の 4 つの E を大切にしている。
 - ・ **Engineering**（道路の整備など）
 - ・ **Enforcement**（警備）
 - ・ **Emergency Response**（緊急対応）
 - ・ **Education**（ビジターへの教育など）
- 気候変動に対する解決策として、新しくビジターセンターを建てる時は 0 エミッションを目指している。気候変動対応の 4 つの柱は、サイエンス、適応、CO2 削減、コミュニケーションと言われているが、中でもコミュニケーションの部分はインタープリテーションが取り組める大きな部分。ある社会学の調査では「野生動物に餌をあげないで」といった看板は 0.4 秒くらいしか見られないことがわかっている。情報をきちんと伝えるには対面のコミュニケーションが大切。看板ひとつにしても色やサイズや単語を厳密に選んでいる。
- 我々は気候変動に対応しているか？各国立公園の状況を調べたレポートもある。（vulnerability assessment）以前までは気候変動に対し「変えていこう」であったが、今は「適応しよう」に変わっている。
- 例えばナイトスカイツーリズムは新たな国立公園の流れ。街灯がないので夜空の観察にはもってこい。天文学者をスタッフに入れて対応している。また、サウンドスケープ（音環境）も最近の取組のひとつ。音を調査し、静かで自然の音が楽しめることを盛り込んでツアーに役立てる。「Nature Fix」と呼ばれる何も人工的な音がしない場所は世界の中でも限られており、48 州で 12 カ所くらいしかない。（※書籍あり）Hoh Rain Forest は静かな場所として登録されているが、Todd さんはこれに同意していないとのこと。
- インタープリテーションとは？（以下 Rudy さんの体験談）ヨセミテ国立公園でインタープリターが「Did you come here to die?」と冒頭に参加者に問いかけた。というのも、このお墓に入っている人は余命一年だと伝えられたため残り僅かな人生をヨセミテで過ごすために来た。ところが、なんだかんだ 10 年近くヨセミテで働きながら暮らすことができた。このストーリーは「Nature can save a life」を伝えている。国立公園内のものには 1 つ 1 つにストーリーがあるので、このインタープリターのようなインタープリテーションをもっと推進すべき。
- Native Tribe との協働にも取り組んでいる。世界遺産に指定されているところも多いため、連携して管理をしている。例えば Native Tribe の写真は誰でも撮れるわけではない。ヨーロッパ系アメリカ

カ人が先住民にしたことには歴史があるため、今でも信頼関係を作るのには時間がかかる。スライドにある写真を撮るのもとても時間がかかった。

- 将来世代との協働も重要。Junior ranger のシステムを全国立公園に取り入れている。（※Kalaloch Ranger Station にて後述）日本でも繰り返し訪れないと完成しない尾瀬のプロジェクトのような、リピーターを生むための取組がある。
- 国際交流から生まれるプログラムもある。レンジャー・ナチュラリストのアイデアはスイスから持ち込んだもの。全ての生物種の記録をする Biobritz はコスタリカから持ち帰ったアイデア。
- 国立公園局の国際部は以前 22 名いたのが今は削減されて 8 名。アメリカが教えに行くだけではなく、お互いに学んでお互いに向上しようというスタンスで活動している。滞在中、あなたのアメリカを見つけて欲しい（Find your America!）。



この日の夕食はウォーターフロントで

9月13日

【Elwha River】

自然再生のために既存のダムを撤去したことで有名なエルワ川。駐車スペースからダムまでは以前は車道があったが、ダムを撤去したことで川の流れが変わり、道路が崩落して現在は徒歩でのアクセスがメイン。ダムは完全には撤去せず、教育普及のために残骸を残してある。片道およそ 3km のコースを歩きながら、レンジャーのお二人にお話を伺った。



エルワ川の看板



道路が崩落した場所

Dean さん（インタープリテーションのスタッフ） & Patt さん（魚類学者でサケの調査を担当）

- コースを歩く前に、まず Land Acknowledgement（土地への謝辞）について知っておいて欲しい。プログラムを開始する前にまず土地の所有者について述べ、敬意を払うこと。Elwha は Native Tribe のクララム族が大切にしてきた川。

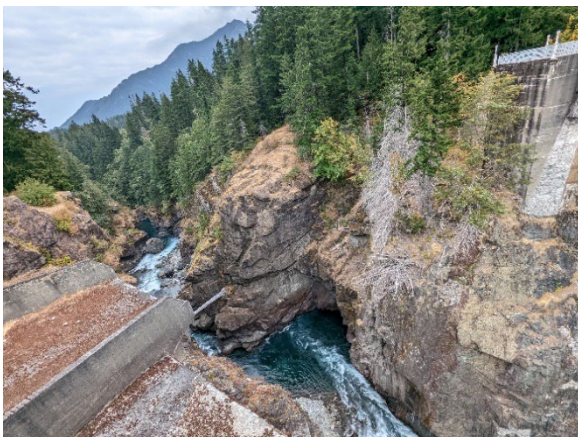
- ダムを撤去するきっかけとなったのは、Native Tribe との条約を守らなかったこと。ダム撤去の取組は Elwha の Native Tribe と一緒に行った。Patt さんは 1989-2002 の長期にわたり、Elwha の部族と信頼関係を構築しながら仕事をした。
- アメリカ政府は Puget 湾の Native Tribe を 1 つだと思っていたが、実際には小さな村ごとに全て違う部族だった。クララム族もたくさんのグループに分かれていたが、政府はこれを 3 つだけだと考え、それぞれの部族ごとに居留地 (Reservation) を設定した。このため、クララムの 1 つの居留地では、敵対していた 2 部族が同じ居留地になってしまった。
- こうした間違いがたくさん起こったため、部族の名前に混乱がある。国境によって分断された部族もいる。Native Tribe と政府の仲もまだ良い状態とはいえない理由の 1 つでもある。
- ダムの撤去で砂や木がどのような挙動をするかが予想できなかった。2014 年にダムを撤去したところ、2016 年にダムへと向かう道が寸断されてしまった。
- エルワ川には Chinook Salmon (キングサーモン) が遡上し、産卵する。サーモンは海と陸の生態系の循環をつなぐ重要な生物。(この日も遡上しているサケを観察することができた。)



遡上するキングサーモン

Kim さん (Lower Elwha Klallam Tribe の Wildlife Program Manager、Cape Flattery で案内して下さった Steven さんの妻)

- クララム族と共に Elwha river wildlife program を実施している。クララム族からお願いされている調査項目は主に以下の 2 つ。
 - 1) Native Tribe の狩猟対象種であるシカやエルク、それらを捕食するクーガーの調査
 - 2) ダム撤去後の環境の反応と回復過程
- 安定同位体を使って、サケによって運ばれる海由来の炭素 (C) や窒素 (N) がどの程度上流の環境に影響を与えているかを調べている。ダムの撤去後、海由来の炭素や窒素が上流でも計測されるようになった。これはサケが遡上し他の生物のエサなどになって生態系をつないでいることを示している。



エルワダム



ダムの遺構は教育のために残されている

- ダムの撤去後、ダムの底で泥だらけになっていた場所に植生が戻ってきた。最初は窒素固定ができるマメ科のルピナスが入り、Pioneer Plant（遷移初期種）として土壌を作った。その後、その他の植物が徐々に侵入し、植生が戻りつつある。種を播くなどして植生の回復を手助けしている。また、どのような動物がどれくらい戻ってきたのか哺乳類調査も行い始めた。
- 調査の多くは多数の研究機関（大学など）と協働で行われている。国立公園局だけでは十分な調査はできない。また、使える資金は限られるため、対象や手法を限定している。
- サーモンはエルワ川の生態系において重要な役割を果たしている。例えば、サケが遡上するようになってから、カワガラスの繁殖頻度が年1回から年2回になった。
- Native Tribe と協働でなければこの調査は実現できていなかった。



啓発のための看板と Patt さん

【Lake Crescent Ranger Station】

クレスセント湖は川が堰きとめられてできた湖。陸封されたマス類2種が進化し、固有種になっている。このレンジャーステーションはビジターセンターではないが、付近の散策路に入園料がかからないなどの理由によりビジターがとても多い。



小さな古いレンジャーステーション



3人のレンジャー。中央は警察警備担当。

- レンジャーの数がものすごく少ない。インタープリテーションのレンジャー2名と警備のレンジャー1名、計3名で回している。にもかかわらず、入園料がかからないなどの理由で週末には1日5000人程度のビジターが来訪する。
- 全てのビジターに対面でインタープリテーションをするのは難しいので、Question Board を活用している。「秋にはどんな意味があるか」「OLYMにはなぜ保全の価値があると思うか」「国立公園に求めるものは」などの質問を書いておき、ビジターに自由に記入してもらうもの。（子どものラクガキができないようにボードとペンは高い位置に設置。）

- ビジターの数が多いため、ごみ1つでも積み重なって大きな問題になってしまいが、して欲しくないこと(Not to do)を伝えるのではなく、して欲しいこと (what to do) を伝えるインタープリテーションを心がけている。例えば「ごみを捨てないでください」ではなく、「ごみを見つけたら拾って帰って下さい」というように。
- EMT (Emergency Medical Technique、緊急時の医療的対応技術) のトレーニングを受けている。(警察警備のレンジャーは必須。) このため、緊急事態に備えて多くの装備を車に積んで走り回っている。
- クレセント湖は Wilderness の中だが、ボートや釣りは許可されている。ただしキャッチアンドリリース。(※Wilderness は一切の改変が許されない完全な自然保護区のこと。)



クエスチョン・ボードの説明を聞く

9月14日

【Beach4】

オリンピック国立公園にはいくつかの散策できるビーチがある。この日は Beach 4 と呼ばれる海岸を散策した。砂浜に岩場（磯）が点在する広大な海岸だが、驚くほどごみは少なかった。

Chris さん (NOAA のスタッフ) & Liza さん (Todd さんが指導しているインターン)

- クリスは銀行員をしていたが、自然に関わる仕事がしたくて大学で学び直し、ボランティアなどを経て NOAA のスタッフになった。
- 海に行って砂漠のようになにもない表面だけ見て帰るのは、サーカスに行ってテントだけ見て帰るようなもの。中にどんなに面白い世界が広がっているかを伝えたい。
- ごみが少ないのはレンジャーが頑張って拾っているから。場所（地形と波）によるごみの寄りやすさもある。ここより北のビーチにはもっとごみが多い。
- 地球の酸素の半分は海の植物（プランクトン、藻類、海草類）から作られている。



Beach 4 を歩く。青いジャケットがクリスさん



点在する磯。生物量が多い。

【Kalaloch Ranger Station】

Todd さんが勤務するレンジャーステーション。ランチタイムに研修参加者で課題に取り組み、Birdie に宣誓してジュニアレンジャーとして認定してもらった。



お昼もそこそこに課題に取り組む



Todd さん, Birdie さん, Mike さん

Mike さん（ノースカロライナ出身の 20 代のインタープリテーションレンジャー、季節雇用とのこと）
& Birdie さん（ベテランのシニアレンジャー、BARK プログラムのプロ）

- ジュニアレンジャープログラムや BARK レンジャー（犬）のプログラムを実施。BARK レンジャーについてはベテランの Birdie が素晴らしい活動をしており、Birdie に認定してもらいたくてクレイロックに来る人もいるほど。
- BARK とは
 - Bag your poo（うんちは持って帰る）
 - Always on a leash（常にリードにつながれている）
 - Respect wild（自然に敬意をはらう）
 - Know where you can go（立ち入れる場所をちゃんと知っておく）
- ジュニアレンジャーの認定もとても多い。このレンジャーステーションは年間 150 日くらいしか開いていないが、1 日 10 名ほどのジュニアレンジャーを認定する。
- ジュニアレンジャーの認定には 2 段階あり、課題となるテキストをクリアして宣誓することで認定を受けられる。課題をこなすために何度も国立公園を訪れることで、リピーターを生む仕組み。
- BARK レンジャーは犬を飼っているビジターにアプローチする取組。



ジュニアレンジャーに認定されました！



Mike さんがジュニアレンジャーを認定中
(この子はドイツ人で英語ができなかった)

【Hoh Rainforest Visitor Center】

オリンピック国立公園の南側、多雨地帯にある温帯雨林のビジターセンター。インタープリテーションのベテランレンジャーである (another) Todd さんに、インタープリテーションプログラムを体験させていただいた。この日のデモンストレーションは Rudy さんも「インタープリテーションのマスタークラス」と太鼓判を押すほどの素晴らしいプログラムだった。一方で、課題について何うと「たくさんありすぎて何時間も話せる」というほどで、スタッフイングを中心に苦労されていることがわかった。

Todd Curling さん

- インタープリテーションはヒトが物事を理解する過程や相互理解が重要。インタープリテーションによりビジターがどんな影響を受けるかなど、心理学的な視点が大切。自分は Sam Ham の下で7年間勉強した。
- Big Idea, Small Budget (大きなアイデアに小さな予算)。
- ビジターがその環境 (例えば Hoh の 散策路) で何を話しているかを 2-3 時間じっと聞いてみる。tangible (目に見えるもの) と intangible (目に見えないもの) をどのように感じ取るか。
- インタープリテーションはロケットサイエンス (難しい科学) ではない。1) 自分の視点にたつて 2) 観客とつながり 3) 基本的なメカニズムに基づいて 4) 物語のあるプログラムを提供すれば良い。特にテーマが重要。楽しませるだけならどんなスタッフでもできるので、テーマからコンテンツに繋げることが大切。
- “Aha モーメント” (Todd さんのプログラムタイトル) は土地への理解や敬意を育てる瞬間のこと。この日の4つの Aha モーメントは
 - 1) 木とサーモンの共通点は?
 - サケ由来の N15 (安定同位体) がハンノキにも入っている
 - 2) あなたの母親が思いがけないことをしたのはいつ・何でしたか?
 - Mother Tree と周りの木は菌糸でつながっており、森の健全性を保っている
 - 3) Upside down-視点を変えてみると違う世界がある
 - 着床植物は木を助けることもあれば倒してしまうこともある
 - 4) 木は他の木にも生える?
 - Hoh Rain Forest では倒れた木が栄養となって次の木が育つ



Mother Tree についてガイドする Todd さん



Hoh 雨林の木々と着床植物

- 自分が初めて Hoh Rain Forest に来たときにびっくりしたことをそのままプログラムにしている。
- 課題は多い。レンジャーの数が少なく、手が回っていない。特に駐車場の問題、野生生物がビジターエリアに入ってきてしまう問題、トイレの管理の問題などが深刻。オリンピック国立公園は広く、ビジターセンターやレンジャーステーションがそれぞれ遠いため、コミュニケーションがとりにくいという課題もある。

9月15日

【Makah Cultural & Research Center】

この日はまずマカ族の文化等についての展示があるミュージアムを訪ねた。オリンピック半島の北西部は Native Tribe の居留地が多く点在するエリア。ミュージアムでの写真撮影は禁止となっていた。マカ族の年配の女性が展示の案内をしてくださった。



ミュージアム前のモニュメント



ミュージアム入り口

- Makah は Neah Bay の別の呼び方。「石とカモメの場所」という意味がある。マカ族はもともとはオリンピック半島の北西部に広く暮らしていた部族だが、政府によって先端の数カ所の居留地に追いやられた。
- 土地だけではなく海も生活の場として活用しながら、4000年前からここで暮らしている。カナダに渡る際、フェリーでは通常パスポートコントロールがあるが、マカ族は自由に行き来ができる
- Native Tribe はティピと呼ばれるテントに暮らしていたと思われがちだが、マカ族では Long House（長屋）に暮らしていた。屋根は可動式で、日中は太陽光を取込み、雨が降ったら閉じていた。
- 狩猟で獲った肉のほか、野菜は野生のものを食べていた。西洋人が来たときに食糧や毛皮と西洋人の鉄器を物々交換したこともある。
- あるとき土砂崩れで村が埋まり、ポンペイのようにきれいに遺跡として残った。1966-67年くらいから11年間、この遺跡に大学の発掘調査が入った。発掘は埋蔵品を壊さないよう、水を使って泥を除去する方法で行われた。発掘品はシアトルに保存されている。このとき出土した人骨を研究者がどうするかが心配だった。

- クジラが打ち上げればリーダーの主導のもとみんなでわけあった。野生生物から油もとっていた。捕鯨も行っており、捕鯨に出るカヌー（船）には家族ごとの文様を彫っていた。冷たい海に漁に出る前には儀式を行った。縫う、織るなどの文化は西洋から伝わったもので、比較的新しい。
- 政府によってマカ語はもちろん、儀式を含めた歌やダンスも禁止された。政府の言うことを聞いたフリをして、家の中で夜にこっそりと歌やダンスを続けた。このために伝統文化は継承され、いまでは西洋人をはじめ多くの観光客がこの伝統文化を見にくるようになってきている。
- 現在は麻薬の蔓延が大きな問題。
- 若い世代がカヌーでパドリングして Port Angeles まで行く Tribal Journey というイベントがある。2010 年には 1 万人が参加した。
- この博物館は、文化の継承、プライド（自尊心）の涵養、マカ族としての責任を実感する場として、マカ族にとっても重要な場所となっている。



見学後、ミュージアム前のベンチでランチ。
レストラン等の営業が不安定なこともあり、
毎日 Todd さんがサンドイッチを用意して下さった。

【Cape Flattery】

アメリカ本土最北西端の岬。駐車場から 30 分ほど森の中を歩くと海岸線の高台に出られる。この日は天気が良く海も穏やかで、景観を楽しむことができた。オリンピック国立公園で 20 年以上仕事をしているという研究スタッフがお話を聞かせて下さった。

Steven Fradkin さん（陸水学者、海洋生態学者。Elwha River で話して下さった Kim さんの夫）

- オリンピック国立公園の資源管理部署に所属。部内には 1) 文化 2) 水産 3) 植生 4) 陸上生物 4) Slow Water の 5 つの課があり、自分は Slow Water のマネージャー。Slow Water 課の中に氷河、潮間帯、湖の 3 つの部署がある。
- オリンピック国立公園周辺はアメリカ西海岸では最も長く大きな Wilderness になっている。オレゴン、カリフォルニアは海岸線に道路が通っておりアクセスが容易だが、ここは道路のないエリアが多く、人の手が入っていない。このためよく保全されている。
- Native Tribe の歴史はおよそ 1 万年、それに対しヨーロッパ人の歴史は 2-300 年しかない。

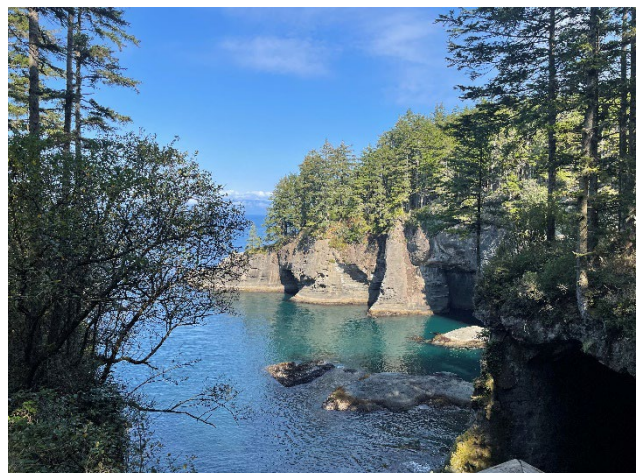


Steve さんと Todd さん

- 多様な環境が海岸線に広がっている。岩礁帯、砂浜、礫地、海藻藻場など多様な環境が混在することから、生物多様性のホットスポットになっている。無脊椎動物と海藻だけで750種以上が記録されている。
- 海洋環境の長期モニタリングを続けている。（水温や海洋酸性化のモニタリングは1900年代初頭から行っているとのこと。）CO₂濃度の上昇による海洋酸性化の進行は深刻な課題。
- 様々な水産資源（Razor Clam など）が生息している。これらは西洋人の商業漁業だけではなく、Native Tribe にとっても大切な資源。
- オリピック国立公園はまだ陸地が隆起しているため、相殺されて海面上昇の影響は小さい。
- 2013年にヒトデの病気が大発生し、半分程度のヒトデが死んだ。まだ完全には収束しておらず、生物群集の構造に大きな影響がある。（※このヒトデはオリジナルのKeystone Species。イガイを食べることで他の生物が生息できる空き地を作る。このヒトデがいるかどうかがこのエリアの岩礁潮間帯の生物群集の構造を大きく左右することが1969年に論文で発表され、生態学の重要な理論となった。このヒトデが多く死んだことで、イガイを食べる捕食者がいなくなり、潮間帯にはより密で広いイガイのベッドが広がるようになったとのこと。）
- 国立公園局は生物の採捕ができないが、森林局は採捕ができる。NOAAの海洋保護区でも漁業はOK。管理主体が複雑に入り組んでおり、とても大変だが、各機関との協働はできている。例えばCape Flatteryの先端から見える島は、陸上は森林局、潮間帯は国立公園局、海面下はNOAAの管轄で、調査等の際には調整が複雑になる。
- インタープリテーション部門のスタッフ（例えばToddさんのような）と研究スタッフが情報を交換する場は公式にはない。聞きたいことがあるとお互いを捕まえて話をしているが、多忙な上にオフィスも離れているためなかなか難しい。それでも、研究スタッフとインタープリターの交流があるのは良いことだと思う。



岬の最先端の展望台にて



海岸線の様子

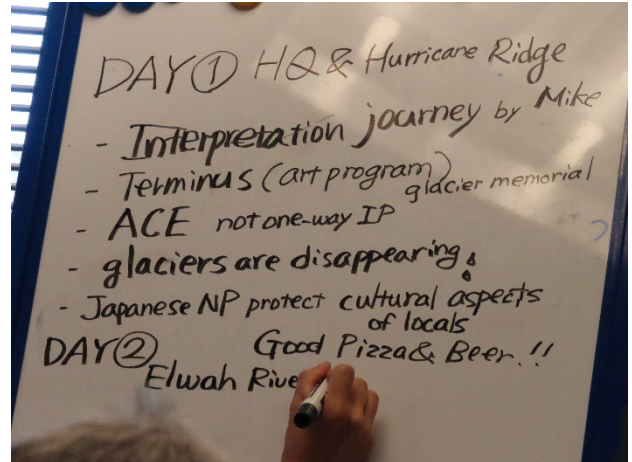
9月16日

【Forks Library】

最終日は Forks の図書館のスペースをお借りし、まずは1日目から順に印象深かったことなどをあげて研修を振り返った。日本からの研修生の他、オリンピック国立公園のスタッフやインターンなども参加して、意見交換を行った。



振り返りの様子



ボードに印象深かったことを書いていく

Day1

【HQ & Hurricane Ridge】

- マイクさんのインタプリターとしての旅が印象的。(Yoshi)
- Terminus プロジェクトが印象に残った。(Yoshi)
- ACE (対面型 IP) が印象的。(Hitoshi)
- 氷河が減っていることがショックだった。(Koji)
- 日本の国立公園が文化的な活動も保全しているのが面白い。(Eliza)

Day2

【Elwa River】

- Land Acknowledgement が印象的だった。(Naoko)
- Chinook Salmon の産卵が見られた。(Yukako)
- ダム撤去後の調査が大変そう。たくさんの調査が長期にわたって実施されている。(Hitoshi)
- 調査は大変だろうが、ダム撤去前後のデータがあるので面白い結果が得られそう。(Naoko)
- 国立公園局が科学調査をちゃんとやっていること、ほかの機関とも協働で調査をしていることが素晴らしいと思った。(Yoshi)
- 自然再生のためにダムを撤去することそのものがすごい。(Koji)
- 日本でもダムの撤去計画はあるのか？(Michael)
 - 自然再生の取組はいろいろあるが、ダム撤去はないと思う。管轄が違う。(Koji)

【Crescent Lake】

- Question Board の設置アイデアがすごくよかった。少ないスタッフでインタープリテーションをする工夫として取り入れたい。(Naoko)
- アメリカ国立公園局はたくさんお金があると聞いていたけれど、実際の現場はすごく苦労している。(Yoshi)
- 何をして欲しくないかではなく、何をして欲しいかを伝えているのがすごくいいと思った。ポジティブなインタープリテーション。(Naoko)
- 国立公園の警察として働いているスタッフと話したのは初めてで印象に残った。(Koji)
- クレセント湖はウィルダネスであると同時にボートが入ったりするなど、レクリエーションに利用されていることが印象深かった。保全と利用の両立が挑戦的だと思う。(Yukako)
- 日本の公園のパークレンジャーはインタープリターなのか？取り締まりはどのように？(Abby)
 - 犯罪の取り締まりは完全に地域の警察に任されている。インタープリテーションも環境省のレンジャーよりは民間が実施している方が多い。日本ではレンジャーは事務仕事とコーディネートなどのデスクワークが多い。(Koji)
 - デスクワークが多いのであんまり楽しくないかも！短期雇用のレンジャーは多少インタープリテーションもやるが、民間がやっているケースが多い。(Yukako)
- クレセント湖では警察と IP のレンジャーでどうやったら事故や犯罪を防ぐかを工夫している。日本でもそういう取組はあるか？(Mike)
- レンジャーがものすごく少ない。孤立した湖で魚が進化したように、人も限られた範囲でできることを工夫しているんだなと思った。(Hitoshi) →It's IP!

Day3

【Beach4】

- 海を表面しか見ないと砂漠のようだけれど、中が面白い、という Chris の説明がとても面白かった。(Hitoshi)
- 海を見て「なにもいない」と帰るのはサーカスに行ってテントしか見ないで帰るようなものだ、という例えがよかった。(Koji)
- 人の暮らしが見えない（開発されてていない）海岸の景色がとても素晴らしかった。(Yukako)
- Chris が Nativer Tribe の人々の海での暮らし（生業）に敬意を払っている様子に感銘を受けた。(Yukako)
- 50%の酸素は海の植物から来ているというのが印象的だった。(Rudy)
- 酸素ができていたということは二酸化炭素をたくさん吸収しているということ (Abby)
- ビーチにごみがない！（Naoko）→Mike と Liza がめっちゃ拾っている！
- 古瀬さんが学生の時に無人島にいくとゴミがいっぱいあったのに比べるとすごい。(Todd)

【Kalaloch Ranger Station】

- BARK Ranger すごい！自分の犬を連れてきたい！（Naoko）

- Junior Ranger に Birdy から認定してもらった！ (Koji)
- 小さいビジターセンターがたくさんあり、それぞれがちゃんと機能しているのが素晴らしい。
(Koji)
- Mike がジュニアレンジャーの認定をしていたところがとっても素敵だった。男の子はドイツから来ていて、英語ができなかった！ (Koji)
- 数百人の子どもが毎年ジュニアレンジャーになる。 (Mike)
- レンジャーステーションは年間 150 日しか開いていない。1 日 10 名としたら年間 1500 人のジュニアレンジャー。 (Todd)
- 古い建物を大切にしているのもいい。 (Koji)
 - 50 年経つと歴史的建造物になるので簡単には壊せない。 (Todd)
 - 政府の建物なので簡単には壊せない。法を破って壊してしまうケースはある。 (Rudy)
- BARK にしても Junior にしても、子ども連れや犬連れを国立公園に引きつける工夫がすごいと思った。 (Naoko)
- 漂着物はどれくらいの量がどこから来ているのか？ (Hata)
 - 太平洋ゴミベルトから、世界中から来ているはず。

【Hoh Rain Forest】

- もうひとりの Todd さんによる素晴らしいインタープリテーションプログラム！ (みんな)
- 長いことこの研修をやっているが、あれはインタープリテーションのマスタークラス。 (Rudy)
- 駐車場の混み具合にびっくりした。10 年前よりビジターが増えている！ (Yukako)
- インタープリテーションはロケットサイエンスではない、という言葉が印象的。 (Naoko)
- Sam Hum の本で TORE から入ったとは言っていたが、ちゃんと理論に基づいて対面型のプログラムを実施されていた。 (Koji)
- 「初めて来たときに何にびっくりしたかを忘れないようにプログラムを組んでいる」という言葉が印象に残った。見慣れた環境だとそういう「驚き」の視点が欠けがちだと思う。 (Naoko)

Day4

【Makah Tribal Museum】

- 生活面に特化して見学しようと思っていた。海からの恵みをもたらないと生きていけない人々がどうやって暮らしているのかに興味があった。ああいう暮らし方を見ていると、どうやって持続的に資源を利用していけるのかを彼らはよく知っていたように思う。それが急激な文明化によって失われているのが残念。 (Hata)
- 日本人も魚卵を食べる、と知ったときのガイドの女性の嬉しそうな顔が印象的。 (Yoshi & Naoko)
- カメノテ、ヒザラガイ、タコ、そうした海産物を食べるのは日本との共通点 (Todd)
- 国立公園のビジターセンターにあまり Native Tribe の展示がないのは何か意図があるのか？
(Koji)

- ビジターセンター建設時、歴史的な部分を考慮して展示を考えていなかった。ハリケーンリッジはリニューアルされるので、インタープリテーションの目的のひとつとして入れるべき。ただMakahの博物館があるので、どうなるかわからない。(Michael)
- ここ OLYM ではできていないが、ヨセミテのように国立公園の中に Native Tribe のセンターがあり、Native Tribe 出身のレンジャーがいるケースもある。(Liza)
- 去年は東海岸で働いていたが、先住民のことは話すなど上司から言われていた。どう考える？(Abby)
 - 行政の中には Native Tribe もいるし、現在の国立公園局のトップもそう。アボリジニとの協力なども検討中。本部では Native Tribe とのコラボレーションを推進する動きはある。国際部の同僚のひとりにはチリの先住民からの派遣団と一緒に似たような研修をやっている。2013 にハワイのボルケーノ国立公園で研修をやったときは Land Acknowledgement をしてくれた。アメリカ全土で同じ国立公園局の管轄下なので統一されるべきだが、各公園が小さな島のように公園長の裁量で動いているのが現状。(Rudy)
 - 先住民によっては格差があるので、シェアしたくないという考えもある。(Mike)
 - 東海岸で言われたのは、先住民ではないのにそれについて語るな、という話だったのかも。(Eliza)
 - 自分が働いていたところは国立公園と州立公園が一緒になったところ。州立公園が下水処理施設を作る際に、Native Tribe にとって神聖な場所に作ってしまった。それを外に出したくなかったのかも。(Abby)
 - 火曜日に公園長がクレイロックに行った。オリンピック国立公園の運営に関してまずは安全を第一にしている人だが、次に優先度が高いのが先住民との関係改善。これからよくなるとよい。(Michael)
 - 日本には産業革命の世界遺産があるが、そこではあまりよくない条件で韓国の人が働かされていた。とてもセンシティブな話題なので、インタープリテーションでそういう話をしないようにという要求が政府からあるケースもあるらしい。(Koji)
 - 政府同士の歴史なのでとても難しい。民間から韓国との友好関係を作るのが大切だと思う。(Yukako)
 - アメリカ国立公園局から 2017 年に「21 世紀のインタープリテーション」というテキストが出ている。そこには持続可能な社会と相互理解についての記述がある。インタープリテーションもそういう世界を目指していくべきではないかと思う。(Koji)

【Cape Flattery】

- たくさんの研究者が公園のレンジャーとして仕事をしている。インタープリテーション部門とも情報交換をしているのが素晴らしい。(Koji)
- にもかかわらず、公式な形では科学者とインタープリターの交流の場がないというのは日本もアメリカも同じだなと思った。(Naoko)
 - サイエントリストがインタープリターになるケースもでてきているのが希望。(Todd)

【研修の最後に：これからどういう活動をしていくか】

「つなげる (Connection) 」をキーワードに、これから何ができるか？

Todd さんからの Dialog クエスチョンとして、以下のことが提示された。

インタープリテーションはつなげるものとか、いろいろな場面で Connect という単語が出る研修だった。つなぐものは人、コミュニティ、自然、いろいろなもの。インタープリテーションはコミュニティをリードするもの、という ACE の考え方から、人々に様々な質問をして進めるのが最近のインタープリテーションの流れ。今まではインタープリターは先頭で引っ張る側だったが、これからはこうした対話を通じてコミュニティを後ろから押し上げることができると思う。そして質問するなら自分が本当に知りたいことを聞くべきだろう。ではこれからは？「つないで」何をしたいのか？何のための「つながり」なのか？

この問いかけに、日本からの研修参加者とオリンピック国立公園のスタッフ全員で答えた。

Hitoshi

自然を通して人と人をつなげたい。孤立すると倒れてしまい、助け合えないので、まずは自然体験を通じて人同士をつなげたい。自分の名前の「仁」は思いやりという意味がある。父からはお人好しだと言われて馬鹿にされたような気がしたが、お人好しになれるくらい人や自然のことを思うのは無償の愛みたいなものだといまは理解している。民族問題や戦争などいろいろあるが、お互いを思いやる気持ちがあればよりよい世界になると思う。

Yoshi

友達を国立公園に連れて行ってキャンプなどをし、少数民族の話などをシェアするのがサラリーマンの自分にできること。それを通じて、タイ人もビルマ人も日本人も少数民族のことをあまり知らないので、理解を深めたい。国立公園が少数民族を迫害しているケースがあることも伝えたい。

Hata-san

自然への気づきが大切ではないかと思っている。普段の暮らしは便利だけれど、遠くに来ないと自然は味わえない。それがどういう意味を持つかを考えたい。昔は自然が暮らしの中にあっただが、今は自然の中は暮らす場所ではなくなっている。発掘して私たちの祖先がここにもいて、自然とどうやってつながっているかということ共有できるようなインタープリテーションをしたい。

Naoko

もともと科学者を目指していたので、科学者とインタープリターを繋げて、よりよいインタープリテーション、よりよい環境保全に繋げたい。それを通じて、海や、それ以外の自然環境が、次世代に良い形

で残るようにしたい。自分は海が大好きな海の人なので、いま自分が大好きな海を、次世代も同じように楽しんでもらえるようにしたい。

Ellie

この数日間みんなと話していて、同じ太平洋でつながっているし、同じ生物種もいるし、種の交換も起こっていることを実感した。個人的にではなくグローバルに考えることはインタープリテーションの成長にもつながる。インタープリターとしての自分の向上にもつながるし、人としてよりよくなる。そしてそれが気候変動を緩和することにもつながるだろう。

Eliza

インタープリテーションを受ける観客が、どこか、自然や共同体につながっている感覚を実感できるといいと思う。人々がどれほどコミュニティに支えられているか、そしてそこに対して持つ責任、何ができるかを考えられるようになると思う。

Mike

インタープリテーションを受けに来る人たちはすでにコネクトしているし、自然に興味がある。すでにコネクトしている人たちに対して、今までにやってきた保全のための努力と、興味を持ち続けて欲しいと思っている。

Liza

インターンシップとしての自分の役目はサイエンティストとインタープリターをつなぐサイエンスコミュニケーションにあると思っている。科学を人にもっと身近に考えてもらうのがサイエンスコミュニケーションの目的。科学は楽しく面白いものだと思えるようになりたい。科学は自分からは離れたものだと思っていたけれど、自分が科学者になってもいいんだと思うと、「自分も意見を言える」という気持ちが出てくるし、それによって世界をもっとよりよい方向に変える力がわいてくると思う。科学を楽しんだ先にはそれがあると思う。

Abby

太平洋が私たちをつないでいる。太平洋ゴミベルトのことも考えると、我々は同じ課題を共有している仲間。背景が違う人々が集まることで、お互いの情報を交換できる。気候変動は70年代からわかっていたのに、科学者がちゃんとシェアしなかった（※もしくは市民が耳を貸さなかった）ので悪くなっている。知らなかったせいで手遅れになる。科学者の情報はそのままでは市民には難しいので、それを簡単にして伝える存在としてインタープリターが重要。

Michael

みんなのアイデアが素晴らしいし、全てをつなぎたい。Toddは「なんのためにつなぐのか」を突き詰めているけれど、とりあえずつなぐことの何が悪いのか。つなぐことが目的でもいい。なぜならこうい

う交流からはポジティブな相互作用しか生まれないと思うから。こうして対面でリアルないろんなつながりができたことはとても重要。

Koji

日本のレンジャーとアメリカ国立公園局のレンジャーをつなぎたい。

Rudy

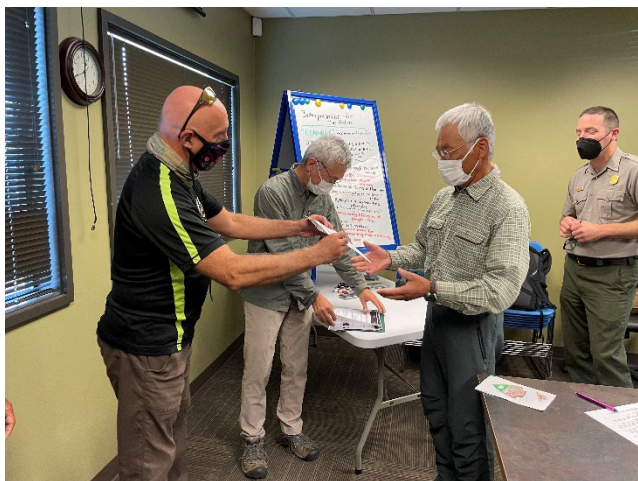
自分には2つの視座がある。1つめは国際部としての立場。2つめは労組の代表としての立場。1つはボランティアでもあるし、投票されてトップになった。もし問題があったら話を聞く役目を14年間やっている。我々の役割は問題を聞いたら国立公園局のリーダーに伝えること。知らなかったとは言わせないこと。70年代に気候変動のことを科学者が言わなかったというが、もう「知らなかった」という言い訳は使えない。国際部としては、こうした活動を上層部に伝えて、知らなかったとは言わせないことが仕事。

Todd

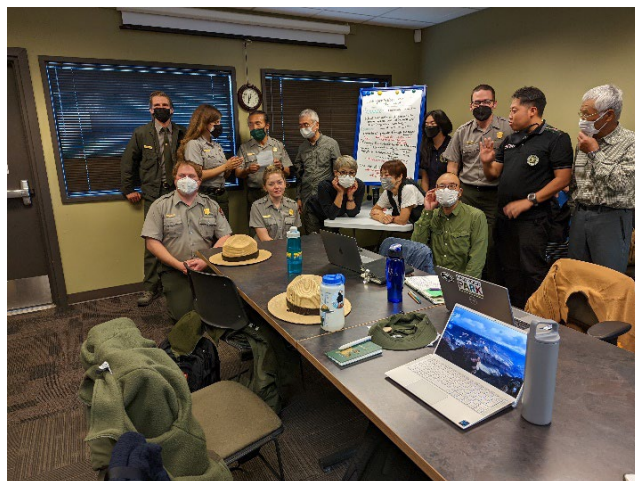
みんなができることはあなたにもできる。我々の知識と能力とハートと力を加えたら物事はいい方向に向くんじゃないかと思う。若いスタッフのみんなに Stay with me でいて欲しい。

【修了証授与】

最後に Rudy さん手作りの修了証が日本人参加者に手渡されて研修が終了した。



修了証授与



意見交換に参加してくれたレンジャーたちと

【終わりに】

コロナ禍に加え、円安とアメリカの物価高が重なり、厳しい条件での研修でした。ギリギリまで議論をくり返し、実施して下さった日本インタープリテーション協会の古瀬さん、増田さん、そしてアメリカ国立公園局の Rudy さんと Todd さんにまずお礼申し上げます。また、こうした厳しい状況を鑑みて、特に Todd さんには現地での食事から移動まで大変にお世話になりました。Forks 滞在中は、夕食は Todd さんのご自宅で自炊、ランチもほぼ Todd さんがピクニックランチを用意して下さいました。少しでも負担を軽く、というご配慮に深く感謝します。毎日運転して下さいました古瀬さん、増田さん、Rudy さん、Todd さんにも重ねてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

少人数での実施ではありましたが、その分、交流が密になり、研修としてはとても充実していたと思います。個人的に、大好きな海辺の環境をたくさん見学できたことがとても嬉しく、毎日ワクワクしていたらあっという間に5日間で過ぎました。研修の内容をなんとか記録に残したいと思い、他の参加者の皆さんにも協力いただいてメモを取りまとめ、整理したのがこのレポートです。報告書と呼ぶにはいささか簡単ですが、記録として、また今後の参考として、何かの役に立てば幸いです。

2022年11月11日

河内 直子